

ネパールの悲劇をどう伝えるべきか



東京都港区六本木の国際文化会館の庭園にて 撮影：高木あつ子

クンダ・ディクシット●コロンビア大学でジャーナリズムの修士号を取得後、国連本部付き記者としてBBCワールドサービスに勤務。その後、マニラに拠点を置く通信社Inter Press Serviceのアジア・太平洋地域局長として、主流メディアでは取り扱われないニュースの取材・編集に携わる。主著 *Dateline Earth: Journalism As If the Planet Mattered* は、環境・開発問題について有意義な報道をするための指南書として、世界各国のジャーナリズム学科で用いられている。カトマンズ大学の客員教授としてジャーナリズム教育にも携わる

Person Kunda Dixit

クンダ・ディクシット ● 「Nepali Times」紙編集責任者

2 006年9月15日、ジャパンフアウンデーションと国際文化会館が共同で実施している「アジア・リーダーシップ・フェロー・プログラム（ALFP）」が今年も始動した。ALFPとは、文化や社会的背景、専門領域を異にするアジアの知識人たちが、2カ月の間、寝食をともにしながら議論を交わし、領域横断的な知的ネットワーク形成をはかるという共同作業型のプログラムである。

すらりとした長身で、いかにもインテリという風貌に温厚な笑みを絶やさないクンダ・ディクシット氏は、ALFP初のネパール人フェロー。ネパールでは誰もがその名を知る国際ジャーナリストで、海外のメディアで活躍後、現在は弟の創設したヒマールメディア社の「Nepali Times」紙などを拠点とし、広く報道活動に携わっている。権力とは常に一定の距離を置き、ときには国王批判もいとわぬその清廉な報道姿勢は、国内外で定評がある。

今回の来日の研究テーマは、アジアにおける草の根民主主義のあり方を模索すること。その視線の先には、近年自国で続いていた緊迫した政治情勢と、その間で生き残りをかけて戦う市民社会の姿がある。これまで世界各地の戦争や紛争を報道してきた同氏だが、それは常に他者の争いだった。いざ自国の内紛となると、「まったく別の次元の話だった」。民主化への道を歩み始めていたネパールで起こった01年6月の王族殺害事件、それを経て、国王、政党、武装勢力、市民が複雑に絡み合っただけで練り広げられた混乱を、国内の隣人に、そして世界に、どう伝えるべきか。自国の悲劇を当事者の立場で報道することの難しさを痛感したという。

日本滞在で唯一残念なのは、ネパールでは毎日欠かさないテニスができないこと、と笑う。長い手足を駆使して縦横無尽にテニスコートを舞う姿は、普段の静かな語り口からは想像できないほど、力強くそして華麗なことだろう。

（八木和美）